新宿区立漱石山房記念館 令和４年度第２回運営学術委員会

議事概要

日時：令和５年３月 27 日（月）10：00～12：00
会場：新宿区役所本庁舎６階第３委員会室
出席者：10 名
半田昌之会長、中村廣子副会長、大木志門委員、大木真徳委員、松下浩幸委員、吉川友子委員、松澤亮委員、守谷賢一委員、小泉栄一委員、北見恭一委員
欠席者：５名
佐藤裕子委員、山岸吉弘委員、鈴木達也委員、山口進委員、波多江誠委員
事務局：村上喜孝（文化観光課長）、北村こころ（文化資源係長）、久米美弥子（文化観光課学芸員）、山田郁也（文化観光課係員）

1　議題
・令和５年度事業計画について

2　議事概要

■委員会での意見の反映
本委員会の前提の整理として、本日、各委員から来年度の事業についてのご意見を伺うが、令和５年度の漱石山房記念館の事業計画は、新宿未来創造財団の理事会等で既に承認された案件か。そうであれば、この委員会で各委員に伺った意見は、事業計画にどのように反映されるか。
→令和４年度第１回運営学術委員会で、令和５年度に企画している展示等を大まかにお示ししました。今回の委員会では、より具体的な事業計画を踏まえて、展示や講座・講演会をさらに良いものにするために必要と感じること、あわせて取り組むべきことなどの意見をお伺いします。取り入れられるものは令和５年度実施事業に積極的に取り入れます。

■令和５年度の展示・イベント
・展示「修善寺の大患」について興味を持った。関わった森成さんの関係にも発展していくということも興味深い。また、他の記念館・文学館等と連携を取っていくことも良

い企画だと思う。
・野上豊一郎・弥生子の特別展の関連イベントについて、能楽のイベントを楽しみにしている。以前に実施された能楽師・髙橋憲正さんの講演会をオンラインで拝見した。令和 5 年度の講演会も同様に髙橋さんを招く予定とのことだが、講演の内容は前回と同様でなく、趣向を変えていただけると、前回参加者も楽しめると期待している。
・『硝子戸の中』では、漱石山房記念館周辺の風景が出ているので、同作をテーマにした展示では、ぜひそこでスタンプラリーやマップの設置を行って、記念館に来館した後、散策をしていただけるような工夫を期待する。また、同作が書かれたのが 1915 年なので、その頃の情景と昭和時代、そして今の情景の移り変わりが分かるような写真などもあると面白い。
・他の記念館の取り組みで面白いと感じたのが、近所の書店を巻き込んだスタンプラリー。早稲田周辺など、漱石山房記念館の近所にも書店があるので、記念館を中心に周辺を回遊してもらい、漱石の作品を手に取って買ってもらうといった試みがあると良い。また、記念館周辺には、生協などタイアップ先も多彩なため、いずれ周辺商店などとのタイアップ企画があると良い。
・いずれの展示もテーマが本格派揃いで格調が高いと感じた。せめて 8 月の夏休み期間は 10 代～20 代の中学生・高校生・大学生あたりの若い人たちが興味を持つようなソフトなテーマの展示ができればいいと思う。

■資料の収集
・事業計画の中に図書室の運営に関する言及がないが、図書室の運営はどのようにしているか。
→図書室の運営については、すでにそろえている蔵書が中心になっております。ただ、新しく発刊・発行された書籍などを継続的に取り入れるようにはさせていただいて、登録を続けております。記念館にある書籍については、新宿区の図書館システムと連動しておりまして、一括して検索できるようになっておりますので、図書館的な機能とも付随した運営となっております。現状、蔵書計画のようなものは用いておりません。当館で蔵書している書籍は新宿区の持ち物なので、今後、蔵書計画が必要になった段階で区と相談し、こうした場でもご意見を聞きながら計画を策定したいと思います。
・展覧会やイベントは外から見える事業ですが、文学館として目に見えないけれどもやっていかなければいけない学芸的な事業というのがある。手に入れた資料の報告と、これからどんな資料を調査・収集して今後の展示に活かすというような計画も、年単位で提示したほうがいいと思う。
・最近出版された図書や研究者が出した資料集など、広く一般的に販売されている資料を今後も継続的に集めていただければ、国内外の漱石研究の拠点になると思う。また現

在ある翻訳書コレクションがさらに充実すれば、海外からの研究者および見学者にも身近に感じてもらえると思う。
・大きなお金が動く一次資料的な物の購入というのは我々も情報共有しているところだが、区民にご理解いただいて、持続可能的に館が発展していくためには、新着図書のご案内などを SNS 等を通じて公に発信していけるようなベースができていくと有効ではないか。

■事業計画の記載内容
・学校教育関係との連携というのは、押し並べて一般的な博物館の大きなミッションとして期待されているが、今後の博物館の在り方としては、地域課題の解決に博物館がどのような役割が果たせるのかという視点が重要になってくる。事業計画の記載について、活動事業の大きな柱の一つとして「地域支援活動」といったものを立ててはどうか。
・各年度の記念館の事業を推進していくベースとなってくる方針や重要な機能である調査研究について、基本方針のような項目を盛り込んでいただけると、記念館の運営そのものの全体像が分かりやすくなるのでは。

■その他
・ボランティアの活用について、事業運営でも地域との連携・交流を意識していると思うので、ボランティアの事業がどうなっていくのかということは重要なところだと思う。朗読系の事業も多いと思うので、ボランティアが活躍する場面も多い。ボランティアは漱石山房記念館のほか 4 館の新宿未来創造財団が管理する施設で、合同で事業として運営されているということだったので、運営の難しさがあると感じた。
・展示に関する質問を受け付ける場所が必要。展示を観覧して疑問を解消したい、知識を深めたいという時には、地下の事務室で職員に聞くか、または隣の図書室で資料を閲覧するなど、個人的に調べるしかない。職員はいつも手が空いているわけではないので、図書館で調べようと思うと、あるテーマを持って調べる時、手に取った本に調べたい内容が書かれているかは本のタイトルから推察するしかない。図書ごとに掲載している内容を登録して、調べたい内容・テーマで関連の図書が検索できるようにするなどすれば改善できるかと思う。
・事業はしっかりされてる一方、ウェブでの発信力が弱い。特に若い人は、それで情報を得ているという状況がある。他の館では、公式ツイッター・インスタグラムといった多様な SNS を駆使して情報発信している。ツイッターでの発信は、区の広報アカウントを活用しているとのことだが、それでは時代に合わなくなっているのでは。館独自の公式ツイッター・インスタグラムの設置は早急に検討すべき。
・文学が小・中学生、高校生がだんだん遠ざかる分野であるという喫緊の課題の中で、文学館がどういう役割を果たしていくかというのは、この記念館だけのものではない課

題。資料館の基本的な学術・学芸のレベルに直結している問題だが、しっかりとした学芸活動をいかに優しく子ども達にアプローチするかが重要。文学も大事だというアピールをするのではなく、子どもが来たくなるような、より親しみのあるプログラムの開発力が必要。さらに大事なのが、易しさや面白さに偏るのではなく、文学館としての一つの存在意義は保ちながら、なおかつ興味を持って研究したいという人だけでなく、フラットな層に情報発信をするソフト。記念館が主体となって開発していけるような中長期の計画を区との協議の中でも話題として挙げて、常に考えていくようなことがこれからの博物館には求められるのでは。

・子ども向けのコンクールについて、児童・生徒の作品を館内に展示することで、本人や家族も一緒に見に来てくれる可能性が高まる。文学を愛好する層だけでなく、地域のご家庭、小・中学生などのお子さんに来館していただき、漱石を知ってもらうことは価値がある。入館者数にも寄与するので、継続的に家族連れに来てもらえるような工夫が大切。

・夏目漱石コンクール読書感想文部門について、受賞者は中学生部門では公立校の生徒が 1 名、高校生部門は 13 名全員が私立校の生徒で、そのうち 12 名を 2 校が占めている。受賞作品を読むと大変レベルが高いと感じる。現在、教育の現場では論説を扱うことが多くなっており、文学作品を扱うことはかなり削られてきている。指導力のある中高一貫校でなければ、授業で漱石作品を厚く指導する余裕がないのが現状。コンクール自体のレベルが高いのは良いことである一方、公立校の生徒がこのコンクールで上位の成績を収めるのは難しいと感じた。

・コンクール受賞者に地域枠のようなものを作ってもいいと思う。大学では、入試合格者に関して地域の学生に限った枠を作っているところもある。それが不公平ではという意見も当然あると思うが、地域に貢献する人材を育てるという意味で設置したので、地域の学校の生徒が受賞する「新宿賞」といったものを作るのもそこまで不公平はないのでは。

・夏目漱石コンクールは全国のコンクールですが、もう少し新宿区内の子ども達に漱石に目を向けてもらえるような取り組みがあるといい。